

『たまらん坂』を書くまで(講演)

黒井千次

武蔵野女子大学で教えた頃

ただいまご紹介いただきましたように、何年前、この大学が女子大学だった頃、客員教授として六年間、創作ゼミや小説論といった内容で学生さんたちにお話をしたことがあります。当時の若い学生さんたちとの触れ合いは楽しく不思議な体験でした。自分の息子や娘が家を出てしまいますと、若い人たちとの接触というものがなくなってしまいます。彼らが日頃どういうふうになっているのかわからない…。そのようなときに武蔵野女子大学に来ました。

女子大というものを具体的には知りませんでしたので、美しい花園みたいなところと漠然と考えているところがありましたけれども、来てみるととんでもない。なぜスカートの下にズボンをはかなきゃいけないのか、どうしてチョッキの後ろに頭巾が付いているのか、学校に来るのに、なぜリュックサックをしょっているのかわからない。このような不思議な若い人たちとっしょに六年間過ごすことができまして、それはそれで楽しい時間で、教えられることも多くありました。

本日の司会役の土屋忍先生も当時は若々しい講師で、熱心に近現代の文学について研究し、積極的に論文を書いておられました。女子大の先生方とは大変親しくさせていただきましたが、万葉集の専門家がいたり、詩歌や能の専門家がいたり、古典から近代現代まで、研究室のどこかに専門家がいるのです。ちょっとわからないことがあると、周りの人に「これは誰に聞けばいいんでしょう」と尋ねるのです。すると、「これは、この先生に聞くといいですよ」と教えてくれる。その先生のところに行くと丁寧に教えてくれる。百科事典みたいな感じで、大学とはさすがに便利なところだと感心しました。学生として通ったことのある大学とは異なる貴重な体験をさせていただきました。

教師として、学生さんたちに「小説を書くということと一緒に考えてみよう」というゼミや授業をやっていたのですけれども、「たまらん坂」という小説を書いたのはその少し前のことでした。

中央線沿線の住まい.....漂流と定着

私はずっと中央線沿線に住んでいるのですが、ある時数えてみたところ、生まれてから十九回引っ越しているのです。父親が役人だったものですから、官舎がよく変わるのです。はなはだしき場合は同じ官舎群の中でも、勤め先が変わると住まいも変わらねばならず、すぐ前の家に移るといような引っ越しや、舞い戻ってみると、昔いた横丁だったという移転なども含めて十九回引っ越しました。

十九回の引っ越しは、ほとんどが四十代にかかる前、今まで生きてきた前半に集中しています。後半、小金井に住むようになりましてからは、ほとんど引っ越していません。ですか

ら、「前半の漂流と後半の定着」と自分では考えているのですが、その後半の定着の部分が武蔵野という土地と関わりがあります。

もう少し言えば、定着の部分で土地の話が出てくる。私の母方の祖父母が住んでいた家が、武蔵小金井にありました。その頃、私は大久保に住んでおりました。小学生の頃です。中央線に乗っておじいちゃん、おばあちゃんのいる武蔵小金井まで遊びに来るのは大変楽しみだったのです。そこには女のいともいきました。母方の祖父というのは軍人でした。職業軍人で、騎兵だったのですが、日露戦争の勇士だったそうです。佐藤少尉といまして、コサック騎兵と戦を交えて、背中を槍で刺されて傷があるという話を聞いていました。槍で刺された傷はどこにあるのだろうと、子ども心に非常に興味がありまして、見せてもらったことがあります。そうしたら、日に焼けた背中に細長く盛り上がって光っているところがありました。それが槍に刺された痕だということです。中に入っていかなかったのが幸いだったのでしょう。

最後はどこかの連隊長で終わったのですが、退役してから、老後を過ごす家を小金井に求めました。その頃、小金井は新開地のようなものできていまして、上官だった中将さんがここに家を作った。「小金井はいいからお前も来い!」と言われて、そこの傍に家を作って住みました。そこが母方の実家になるわけですがけれども、そんなふうにして軍人さんが集まりまして、最初に中将がいて、うちが大佐なんですね、それから少将がいて、わりと偉い人が三人か四人いて、海軍の人もひとりいて、軍人さんが作った一種の住宅地みたいになっていました。一区画が二百坪くらいで、和風の家に洋風の応接間がひとつついている。庭は芝生で、陽が当たる……、まだその時、土地は借りていたんだそうですけれど、そういう家が何軒かある。

戦後になって米屋さんに聞いたところ、その横丁は「軍人横丁」というんだそうで、軍人さんばかり集まっていたからその名前がついたそうです。ところが軍人さんは昔、亭主の方が年上ですから、先に死んじゃうんですね。次々に歳をとって死んでいくと、後は未亡人ばかりになる。未亡人はそれはそれなりに家を維持していくわけですが、その道は今度「後家横丁」と言う名に変わったそうです。それから、これは僕が名付けたのですが、その後家さんもだんだん亡くなっていき、次々とお弔いが出るので、「弔い横丁」にしようと思いましたが勝手に考えた。それはないけれども、「軍人横丁」と「後家横丁」は本当にあったんですね。「弔い横丁」は私が勝手に考えて、自分の書いた小説のタイトルに付けたわけですが……。そういうところがあったのですが、小さいころから懐かしい土地で、よく遊びに行きました。小金井は大久保あたりから中央線に乗りますと一時間くらいかかりました。まだ車体がギシギシ鳴るような木造車で、側面は羽目板みたいな木が縦に張ってある、鈍い海老茶色の、「省線」といってましたかね、その電車に乗って小金井に遊びに来るのが楽しみだったのです。それが昭和十年代ですね。

当時、小金井にちょっとしゃれた新しい住宅地を作ろうという運動がありまして、それは国立の土地が開けるのとそんなに違わなかったんじゃないかと思います。一戸が生垣のあ

る二百坪くらいの土地で、さきほどいったような家が建っている。生垣を作ると、当時は町でしようけれど、町から補助金が出たらしく、みんな一生懸命生垣を作る。記憶にあるところでは横丁の家はみんな生垣でした。木はいろいろでしたが、祖母の家は柵でした。そういう横丁があり、そこに遊びに来て過ごしたわけですが、そういう幼年時代があって、それはそれなりの歴史をはらんでいるわけです。

そういうわけで十九回も引っ越した中の一つとして武蔵小金井に住みました。最初は前原町という小金井の駅から多磨墓地の方に坂を下った先のところ、野川のほとりになります。当時は土手も今みたいにはなっていませんで、川も土の崖の間を流れていまして、雨が降ると氾濫するんですね。その氾濫する下の方だったので、大雨が降ると大変でした。そこは東八道路ができる時に接収になり、その頃、祖母の家はおじいさんが亡くなり、おばあさんも亡くなり、その土地を子供の兄弟姉妹五人が相続をしたんです。母のその土地に住みつきまして、そこに四十何年住んでいることになります。

最初の前原町にいた時期と、今の学芸大の側、本町の二か所に住んだ経験があります。あの辺は地形が入り組んでおりまして、国分寺崖線といいまして、二つの地層がぶつかり合っています。中央線の線路の北側が高い方、南側が低い方、低い方は野川も流れているし、そのままずっといけば、多摩川までいってしまうような起伏がある土地です。もっと細かくいえば、北側の方は、高いところではありますが、上の方を玉川上水が流れている。それから電車の駅になって線路をこえて坂をだらだら下るといって、どこにいてもそういう地形がある。三鷹あたりはそんなに顕著じゃありませんが、東小金井あたりから急な坂を下っていくことになります。そんな急な坂の途中の南を向いた斜面、多摩川を下に眺める南を向いた斜面に、その昔、人が住み始めた。そこに建物を建てるために掘り返したら遺跡が出てきた。縄文の末期か弥生の初期のもので、工事が中断してしまったという話がありました。確かに北側が遮られて下に川が流れている南斜面は住みやすかったろうなと思います。

武蔵野の文学

国木田独歩『武蔵野』

武蔵野について考えてみようという時には皆さん誰も同じように、国木田独歩の『武蔵野』がまず頭に浮かんでくると思います。たとえば新潮文庫に他の短篇と一緒に入っていますが、『武蔵野』の中に出てくる地名が、武蔵境の駅から、玉川上水に向かって進むと、桜橋ですか?その桜橋のところにある碑が独歩の碑ですよ。桜橋まで歩いた先にお団子屋さんがあって、お婆さんがお茶とお団子を出してくれるというのが『武蔵野』の中に入っています。余計な話をすると、その第一短篇集は、明治三十一年一月に『国民の友』という雑誌に発表されたのですが、その『武蔵野』はエッセイといいましょうか、紀行とでもいいまいしょうか、その中に武蔵野あたりの土地の事が書かれている。武蔵境の駅を下りて、北の方に向かって、玉川上水にぶつかって、お茶屋で休んでいる。その時のことを書いているんです。

その時期、独歩は詳細な日記をつけていました。それがまた有名で、『欺かざるの記』といいまして、そのなかに武蔵野を散策する記述があります。日記の方を読むとちょっと違うんですね。違うというのは紀行文の中の事情とはちょっとニュアンスが違うんです。

その頃独歩は佐々城信子という女性に恋をして、結局実らなかったわけですが、悶々としている時期にその女性を誘いだし、飯田橋から列車に乗って武蔵境で下りて歩いた武蔵野行が日記の方に書かれています。紀行文の方には出てきません。その日記を読むと、二人で歩いて、武蔵野の林の中に入るんですね。すると林の中に光が、葉の間からさして、きらきら光ったりして大変美しい、非常にロマンチックな情景にぶつかります。そこら辺になりますと記述が大変高揚してきまして、接吻また接吻というような文章になってきます。

あるとき、大岡昇平さんにお目にかかったことがあって、大岡昇平さんも『武蔵野夫人』という小説を書いています。やはり、武蔵野にお住まいだった。はけの道のそばにお住まいだったので、土地の事は研究されていたわけです。『武蔵野夫人』という長篇小説ですけども、『武蔵野夫人』の中の比較的初めの方に武蔵野の地形について述べる描写がありまして、それは非常にカチンとした鉱物質の堅い感じのもので、「斥候のような、軍隊の兵士の敵状視察のようだ」という評価もありました。そういう書き方をした地形をもとにした武蔵野の描写が『武蔵野夫人』にありました。

大岡さんも『武蔵野』について関心をお持ちだったので土地の話をしておりました。『欺かざるの記』の中にそんな描写が出てきますよね、と言いましたら、ああそうだそうだ、いろいろ調子のいいことが書かれていたなあ……、だけど、あれは接吻だけで終わったと思うか?と笑いながら言われたのを覚えております。武蔵野の林はそういうことを考えさせてくれるような、林でもあった。明治・大正・昭和にかけて基本的にはそういう林があったんですね。

武蔵野について考えたり書こうとすると、まずどうしても国木田独歩の『武蔵野』という短篇が出てきてしまうので、余談ですが、少し述べさせていただきます。

この短篇集『武蔵野』に関しては、林の情景が美しいとか、自然の書き方が卓越しているとか、いろいろな言い方があると思うのですが、二か所だけ、最初に読んで、頭から離れない文があります。そこを、ちょっと読んでみます。最初の方、九章です。

「必ずしも道玄坂といわず、また白金といわず、つまり東京市街の一端、あるいは甲州街道となり、あるいは青梅道となり、あるいは中原道となり、あるいは世田ヶ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する処の、市街を配合して一種の光景を呈しおる場処を描写することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。なぜかような場処が我らの感を惹くのだろうか。自分は一言にして答えることが出来る。即ちかような町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思をなさしむるからであろう。言葉を換えて言えば、田舎の人にも都会の人にも、感興を起さしむるような物語、小さな物語、しかも哀れの深い物語、あるいは抱腹するような物語が、二つ三つ其処らの軒先に隠れていそうに思

われるからであろう。さらにその特点を言えば、大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落ち合って、緩かにうずを巻いているようにも思われる。」

ここはよく取り上げられるところですが、要するに、武蔵野というのはただ地形とか植生といった自然だけが面白いのではなく、人々の都市生活と田園生活、そういうもののぶつかり合いが面白いのです。もうひとつ有名なところですが、「武蔵野に散歩する人は道に迷うことを苦にしてはならない。……」非常に有名な部分です(第五章)。これはなかなか名文です。

「どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はただその縦横に通ずる数千条の路を当てもなく歩くことに由て始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶらぶら歩て思いつき次第に右し左すれば随所に吾らを満足させるものがある。これが実にまた、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じている。」

そのあと、道に迷った時のことが出てくるんですね。

「もし君、何かの必要で道を尋ねたく思わば、畑の真中にある農夫にききたまえ、農夫が四十以上の人であったら、大声をあげて尋ねてみたまえ。驚て此方を向き、大声で教えてくれるだろう。もし少女であったら、近づいて小声でききたまえ。もし若者であったら、帽を取て慇懃に問いたまえ。鷹揚に教えてくれるだろう。怒ってはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。」

つまり、自然の中で暮らしている、東京近在の農家の人たちの立ち居振舞い、生きていくスタイルとといいますか、自然に身に付いているものが、年配の農夫、若い女の子、若者というふうに分けられている。そういう人たちの織りなす生活の一端というものが、さきほど言いました、自然と都会とが融け合う接点として国木田独歩の目に映ったのでしょう。独歩の『武蔵野』はあまりにも有名ですが、昔読んだものでも、年を経て読み直してみると、昔と違った形で読める、自然を見る目も変わってくると思います。

三浦朱門『武蔵野インディアン』

もうひとつ、武蔵野を書いたもので、三浦朱門さんの『武蔵野インディアン』という小説があります。これは『文藝』という雑誌に一九八一年四月に発表されまして、単行本で出ています(河出書房新社、一九八二年)。

三浦さんは中学校は立川、二中(旧制)です。昔の府立二中です。三浦さんはたしか、武蔵境に住んでいらした。それで、立川の二中に通われた。その時の友達と大人になってから出

逢うという話で、幾篇かの連作小説です。

主人公が大人になってから昔の友達に会うわけです。中学時代の悪友たちは市長になったり、それぞれ偉くなっているわけです。話していると、その中の土地の地主の息子ですかね、主人公をつかまえて、お前らは東京白人じゃないか、ご維新後、近代の日本になってからこっちに来て住みついた流れ者みたいなもので、それは東京白人というのだ、それに対して俺みたいに土地に生まれて土地で育って、先祖代々土地を耕してきた人間は武蔵野インディアンだ。武蔵野インディアンと東京白人は違うんだと、半ば冗談、半ば本気で語るころが出てきます。

武蔵野インディアンというつかまえ方が非常に面白い。他の武蔵野を書いたものとは違う、武蔵野そのものというよりは、武蔵野の人を書いた作品として面白いと思います。

大岡昇平『武蔵野夫人』

もうひとつあげますと、さきほどお話した大岡昇平さんの『武蔵野夫人』です。これははけの道、国分寺崖線の下の方を流れている川のちょっと上の方あたりで、場所を特定することはできないのですが、斜面に建っているところの家が舞台になっています。大岡さんが実際、戦中、戦後にかけて一時お住まいになっていた家があるようです。

戦後の恋愛小説で、野川の水はどこから流れているのだろうと遡って行ったり、男と女が東村山の方で雨に降りこめられて、旅館に泊まらざるをえなくなってしまったり、いろいろなことがあるのですけれども、武蔵野という土地が舞台になっていないと、ああは書けなかったろうと思います。同じように起伏のある土地でも、関西を舞台にしたら、ああは書けずに別の小説になっただろうなと思います。

その武蔵野も土地がだんだん広がってくる。大岡昇平さんの書かれたものなどをみると、昔は渋谷のあたりで水車が回っていた。だんだん人口が増えたり、人家が多くなったりして、西の方に広がっていく。その一部に小金井も入っている。子供の頃、おじいちゃん、おばあちゃんの家に遊びに行くと、まだ井戸でしたけれど、朝起きると井戸が凍っていて、すぐには水が使えないということもありました。そんなところがこのあたり、東京西郊だったわけですね。

なかなか本論には入らないですね。自分の小説というのは話しにくいものですからね。なるべく近寄らないようにぐずぐずしているのですが.....。

『たまらん坂—武蔵野短篇集—』

自作については大変しゃべりにくい。自分はこういうふうにして、こう書いたということはもちろんありますけれども、それは必ずしも実現しているわけではないですから。自分が思ってもいかなかったようなところを面白いといってくれる人が多かたりすると、あんなこといわなければよかったと後悔したりしてしまう。

『たまらん坂』というのは七篇の短篇からなっていて、サブタイトルにも「武蔵野短篇集」

という名を付けました。これは武蔵野を舞台にした短篇を幾つか並べて、その連作で武蔵野という土地とそこに生きる人々姿を書いてみたいと考えたからです。

小説には長篇小説というものがありますね、もうひとつ短篇小説というものがあります。それから、これは後に出てきた概念でしょうが、中篇小説というものもあります。長さによってそれぞれ違うわけですが、どこからが長篇で、どこからが中篇かという区分は大変難しいものがあります。時代とともに動いています。

志賀直哉や私小説の作家たちが書いた短篇というのは四百字詰原稿用紙三十枚とか四十枚とか、そのくらいの長さだったのではないかと思います。僕が書き始めたといひましようか、デビューした一九七〇年前後は八十枚~百枚が短篇の限度だったように思います。最近、ほぼ二百枚前後に落ち着くようだとされています。それにはまた、いろいろ理由があると思うんですが、ひとつは、短篇という短かさの感覚がだんだん薄れてきてしまったことです。

短篇小説というのは、どこか鋭利な刃物で切るみたいなのところがないと、うまくいかないと思うんですね。しかし、なかなか鋭利な刃物で切るというふうにはいかない。何か棒で叩いているみたいな感じになってしまう。シャープじゃない。それで二百枚くらいの長さまでいってしまっている。そうすると全体が緩くなってきてしまう。これは新人の小説についてよく言えることで、全体については言えませんけれども。

また、これは想像ですけれども、おそらく手で書かなくなったことに、多少の関わりがあると思っています。ここの学校で創作教室、ゼミをやっていた時も、作品の原稿は四百字詰の原稿用紙に書いてくれと言いました。

教室で出てくる作品を見ると原稿用紙に自分の字で書いているので、ちゃんと書いているじゃないかという、パソコンで打ったのを手で清書しましたというんですね。オリジナルの発想が逆だと思うんですね。パソコンが出る前は、手で書いたものを活字にして印刷するのが順序だったのが、今は全部パソコンです。なんでそういうふうになるの?ときくと、頭の動きと言葉とがシンクロしないというのです。考えたこと思ったことが手書きではシンクロナイズしない。パソコンの方が早いんです。と言われると、こちらは経験がないので、そうなのかとしか言えないんですね。

そこがなぜ長さに関係あるかという、これはまた想像ですけれども、原稿用紙に小説を書いていきます。書いたものが、一日に三枚書くとか五枚書くとかして、だんだんたまってきます。一枚目を下にしてだんだん重ねていきます。例えば十八枚くらいのときに、トントんと揃えていきます。そうすると、十八枚の原稿用紙の重さというのが、必ず掌に感じられるわけです。それが二十枚になり、二十五枚になり、だんだん重くなってきたなというふうに変って、小説の長さというのは、手で紙を持ったときの重さというものとどこか生理的にリンクしているように思うんです。それを機械で打つようになったら、確かに違うだろうなあと思う。直したり、入れ替えたりが容易で、先生こっちの方が楽ですよ、といわれましたが、そういう気にはなれない、長さの感覚が紙の重さとしてではなく、字数としては出てく

るかもしれませんが。

『たまらん坂』の構想と発表誌

それで、あんまり長くないものを七篇くらい短篇として書いてみようということを考えました。当時、中央公論社が出していましたが、『海』という文芸誌がありました。その『海』という雑誌の編集者に、武蔵野を舞台にした短篇を幾つか書いてみたいという話をしました。主人公が共通になるというわけではありませんけれども、土地のあるエリアが共通の舞台となっていると考えて書いてみたいということで、最初が『たまらん坂』になるわけです。その小説が出て、変な小説だねともいわれたし、面白かったといってくれた人もいました。しかし、その時に小説を載せてくれた中央公論の『海』という雑誌が、『たまらん坂』が載った号でつぶれてしまった、というか廃刊になってしまったんですね。それで、発表する場所がなくなった。独立した短篇ならよかったですけど、連作を考えていたので、先の見通しがなくなった。そこで他に考えていた連作の方に力を入れることになります。それが『群棲』という小説でありますけれども、これは一本の横丁に住んでいる四軒の家が舞台になっています。それよりもっと広い空間でいろいろな人が自由に出入りする場所がほしいなという感じが「たまらん坂」の連作にはありました。

それから何年かして、福武書店から『海燕』という文芸誌が出始めました。その『海燕』で、あの小説を続けるなら、うちでやらないか、と声をかけてくれまして、是非やらしてほしいといって、それが七篇たまって『たまらん坂|武蔵野短篇集一』となったというのが成り立ちです。

この「たまらん坂」を書いたのは、一九八二年の『海』という雑誌でしたから、私が五十歳くらいの時で、もう二十三年くらい前になります。

「たまらん坂」という坂について

坂というのは地形の変化を示す言葉であって、ある表-情がありますよね。男坂。女坂なんていうのもそうですけれども。そういう坂道を面白いと思っていたことがずっとあって、そのなかに「たまらん坂」という坂の名前がでてきたのは、書物でもなんでもなくて、実際に車で走っているときに見た駐車場の看板なんですね。その名前が、どうしてかわからないけれども「たまらん」がひらがなだったんですよ。そのそばに「たまらんぎか」というバス停があるんですが、そこは「多摩蘭坂」と書かれています。これは当て字なのか、漢字をひらがなに開いたものが本当なのか、そこら辺がなんとなく気になりました。

「たまらん坂」は小金井の方から来ますと、国分寺を過ぎてくねくねといっぺん下がって、又、上がって、昔の鉄道研修所ですか、そこにぶつかって、それを越えて、府中街道を越えて、国立のちょっと手前の、急にぐっと下がる坂です。その坂が「たまらん坂」という坂です。

国立に紀ノ国屋という、本屋ではなくて食品を売る店があります。時々そこに行かせられ

ますので、女房を乗せて車で走って行くと、帰り道、坂を登り始めるその左側の駐車場に「たまたまらん坂」というかなり大きな看板があり、それがひらがなで書いてある。

なんかその「たまたまらん」という字が“たまらない”。という感じに飛び込んできちゃったんです。たまらない坂というのは一体何だろう。地図やバス停もそうなんですけれども、調べると、多摩蘭坂と漢字が出ています。だけど、あれを漢字にしてしまっただけでは何ともつまらない、たまらない。どういうわけかは知らないけれど、“たまらない坂”、なんだと思った方が面白いのではないかと思っていただけです。そういうことを思っただけで、土地をベースにした、武蔵野をベースにした短篇を幾つか書いてみようと考えていたときに、その坂を上り、坂を下るという上り下り、高い土地と低い土地をつなげる道というものを、たまたまらん。という形で表現するとしたら、どういうことになるのかということ、一生懸命考え、それが『たまたまらん坂』という小説を書いてみようとしたモチーフ、きっかけになっているのです。

忌野清志郎の曲『多摩蘭坂』

作品の中にも出てきますが、たまたま、忌野清志郎が『BLUE』というアルバムを出しました。そのアルバムのなかに『多摩蘭坂』という曲が入っているのです。ちょうど息子が高校生か浪人をしていた頃の話です。

ご承知のように、忌野清志郎は先日亡くなった、あの有名な歌手ですけれども、日野高校の出身なんですね。武蔵野の子であるわけです。武蔵野の子である彼が、「多摩蘭坂」に住んでいて、その「多摩蘭坂」のことを作詞して、歌った曲である。その『多摩蘭坂』が入った『BLUE』というアルバムを息子が持っていたんですね。それで、「多摩蘭坂」を実際に聴いてみました。清志郎の「たまたまらん坂」は漢字の「多摩蘭坂」です。地名の地図にあるのと同じです。そこにいくと忌野清志郎という歌手は変な声で、変な高低で投げおろしみたい

に歌っているけれども、実に言葉がよく判るんですね。その忌野清志郎が「多摩蘭坂」に住んでいて、住んでいた土地の事を歌詞にしたのです。「多摩蘭坂を上り切る手前の坂の、途中の家を借りて住んでいる。」「お月さまのぞいてる君の口に似てる」「キスしておくれよ 窓から」そんな歌詞です。

音楽のことはあまり詳しくありませんけれども、スローバラードといいましょうか、『雨上がりの夜空に』とか、『僕の好きな先生』とかとはちょっと違う、詠嘆調のしみじみとした曲です。その忌野清志郎という。ミュージシャンがたまたまその坂の途中に住んでいたのでしょう。その坂を曲にしたのが面白かった。ぼくとしては、漢字じゃなくてひらがなにしてほしかったなあとと思ったのですが。

その忌野清志郎も「たまたまらん坂」を歌っていることを知って刺激を受け、その坂の事を調べてみたいと思ったのです。

『たまたまらん坂—武蔵野短篇集』の中の各篇について

『たまらん坂』

『たまらん坂』では、どうしてその地名が付いたのかという地名の探索を、もうそう若くはない、勤め人の男が始めるのです。特にストーリーがあるわけではないのですが、坂を登って家に帰るという感覚ですね、それが勤め先というものと、登って帰って行く「家」というものをつなげていくわけです。だんだん体が、肌が「家」に馴染むようになるように歩きながら、坂を登りながら「家」に近づいていく。登っていくことによって「家」に入るにふさわしい体が変わっていく、そういう感じの坂を上り下りする。夫婦でけんかをすれば、飛び出した女房は後ろも見ずにその坂をまっしぐらにかけおりに行く。そういう場所としての坂です。

この辺は昔、古戦場だったという話もあるので、その昔、落ち武者が刀を校みたいについて、よろけながら登っていく、逃げていったという説もあるのではないかと、江戸の方から来た商人がどうしたこうしたという説もあるとか、図書館に行ったりして調べていくという小説です。わかった、これが真相だということに意味があるわけではなく、ただ、そういうことが気になって調べに行くというプロセス、過程自体がその男が活着しているということの申味であり、そういう人の住んでいるという土地として、高低に富んだ「たまらん坂」という坂がある。それを書いてみたいという気持ちが大変強く起こって出来たのが、『たまらん坂』という小説です。

その時は何もわかりませんから、あちこち調べに行ったり、図書館をのぞいたりしたのですが、偶然の産物といえましょうか、大学の卒業生の文集みたいなものを見つけてそれが、ひとつの手がかりになったりしました。『たまらん坂』というのは、そういう坂の名前の興味から、触発されて書いた作品ということになります。坂の名前にじゃれているみたいなどころもあるのですが。

坂の名前の出来は、その時そこを生きて通っていった人たちの、活着していることの輪みたいなものを含んでいる。それをどういうふうに時代は受け継いでいるのか、表現しているのか、考えてみてもいいんじゃないかということで出来上がったのが、『たまらん坂』なんですね。

『おたかの道』

『海燕』という福武醬店から出た雑誌に次に書いたのが『おたかの道』という小説です。これは国分寺跡の近くに真姿の池という水の湧いている池がありまして、そこから清流がずっと流れています。そのあたりに「お鷹の道」という名前が付けられていて、今では完全に遊歩道になっています。この名前に興味を惹かれたのは、「お鷹の道」という名前でした。新聞か何かで「お鷹の道」というのが、国分寺にあるというのを知りまして、その時頭に浮かんだのは「おたか」という平仮名だったんですが、実際には漢字で、江戸時代、将軍が鷹狩りの時に通った道がここだと観光案内みたいなものを書いてありました。僕の頭に浮かんだのは「鷹」ではなく、ひらかなの「たか」で「たか子」という女性の名で、自分の中に

何か引っかかっている。それはこの小説の中の話とは直接関係ないのですが、おたかさんという人がいまして、そのおたかさんという名前は暮らしの中でよく口にしていた名前でした、女性だったのです。おたかさん、おたかさんとよく言っていたので、「お鷹の道」とそれがくつついちゃったんですね。あの道って一体どんな道だろうと思ったのです。はじめに「鷹」だと思っていれば別だったんでしょうが、「おたか」という人名で考えたので強く惹かれて、道がどんな道か、探しに行ったんです。実際に歩いて見に行きました。この辺に出てくる地形の描写は本語のものです。そのなかに出てくる人物の関係だとか、あり方というふうなものは小説ですから、自分が想像した中で地形から生み出されたような人柄が書ければいいという感じで書いたものです。人物はフィクションですが、土地だけは地形だけは可能な限り詳細に書かねばならないと考え写実的に書きました。

『おたかの道』も『たまらん坂』もそうですが、前後の関係、左右、上下、地形から、植生から、わかったものは書く。そういうものが生み出してくる、そういう中で生きている人物との関係、その地上に生みだされているドラマ、それを描くという形で書きたいと思って出来たのが『おたかの道』という小説です。

読み返してみても思ったのですが、土地がそういうふうになる。そのなかでストーリーを生みだしていこうと考えると、どうしてもそこに、歳月、年月が関わってくる。それと人間と人間の関係、この短篇の場合、例外なく男と女の間で発生する話、年月というものを隔てて、ああ変わったり、こう変わったりするといったことで作られているということ、後で読み返してみてもあらためて感じました。

『せんげん山』

『せんげん山』というのはご存じの方もいると思いますが、新小金井街道の東側に斎藤病院という精神科の病院があります。歌人でもあった斎藤茂吉さんの始められた病院が青山にありまして、その病院がここに移ってきました。最近亡くなりましたが、斎藤茂太さん(モタさん)といわれていた方が院長をされていた精神科の病院があります。その病院の裏手みたいなところが一か所、細長く盛り上がった地形になっていまして「浅間山」と名前が付いているんですね。

今は住宅が建って、あんまり露骨にはわからないんですが、まわりが畑だった頃は畑の中にいきなりなだらかな山が出現しているんですね。

前原町にいたころは、それをみながら、あんな変な格好の山は古墳かなんかではないだろうか、そうでなければ平地にあんな山が出てくるわけではない、不思議だなあと思っていたというのが、そもそもの始まりです。たまたまそこを歩いてみたことがあります、手入れがされていて都立の公園になっているんですね。意外に高低があってどんぐりの木があったり、枯れ葉が積もっているところがあったり、なかなか面白いところで、一番上に小さな祠がある。そこに書いてあった説明によると、隆起してできたとかそういうものではなくて、土地の周りの土地が多摩川のほうにぐっと引っ張られていったときに残った部分で、突起

みたいなものですね。高さとかどのくらいあるのでしょうかね。数十メートルしかないんでしょうけれど、そこに入っていくとふしぎな感じがする、いい気分になれる場所です。

その山と小金井に新しくできたマンションの間を初老の男がうろうろする話です。隆起したのではなく、まわりの土が多摩川の方に引っ張られた時にそこだけ残っちゃったという間抜けな山の感じが面白い。かつての上司が新婚家庭に呼ばれて行って、亭主が遅くなって帰って来ないという新婦と客との、そういう二人の間の関わりみたいなもの、そのあたりを書いたら面白いんじゃないかなと思って生れたのが「せんげん山」です。

『そうろう泉園』

「流浪泉園」という庭園は小金井の連雀通りに実際にあります。国分寺崖線にかかっているわけです。その道から南は野川の高さまで下っていく傾斜地が別荘地となっており、そこに別荘が作られていたらしい。高低が激しく、下に湧水があってその水が庭に流れて池をつくるなかなか面白い庭園なんですけど、狭い所です。マンションが建ちそうだったので反対運動が起きて、都が買い上げて、「富浪泉園」として残されました。

そこは、ものすごく蚊の多い所なんです。池がありますから、ほんとにすごい蚊です。もちろん季節によりますが、二度ほど行って閉口しました。その東屋にノートがありまして、来た人が記念に書いていくノートですね。そのノートを見ていまして、特別に面白いものがあったわけではないのですが、こういうノートがここにあるとしたら、このノートの中にどんなことが書かれていても、書いた人もわからないわけだし、いつ書いたかもわからないんだけど、何が書かれていても、おかしくはないだろうと考えながら読んでみたんですね。特に面白いものにはぶつかりませんでした。

その後、いわゆるお見合いというか、知り合いの若い男女が家に来てお茶を飲んで、その辺を散歩してもらいたいな真似をやったことがあるんですね。うまくいきませんでしたけれども。その時の若い人たちの後ろ姿と、倉浪泉園にあったノートなどを結びつけて、ひとつの話になったのが『そうろう泉園』です。ノートの中に昔自分が知っていたかもしれない女名前の文章があって、その文章にまた来るみたいなことが書いてあって、それが気になってきて、自分も何か書こうかみたいな話になっています。

これから結びつくかもしれない若い男と女、結び付きようもなく離れてしまった初老の男と女、そういう二組の組み合わせというのが面白い。溢浪泉園という、崖の途中にこんこんと水が湧いているところですが、そういう水の流れをベースに男と女の間関係を書いてみたいと思ったのがきっかけです。

話は七つありますけれども、そしてストーリーの派手な展開というものはないのですけれども、『そうろう泉園』の場合はもう少し書くと、もう少しなんか書けたかなという思いが残って、少し残念な気持ちがしなくもない。

『のびどめ用水』

『のびどめ用水』というのは、玉川上水からの分流ですが、野火止ってというのは野の火を止めるって書くんですけれども、これは「音」というよりもむしろ漢字です。火を止めるというその字に惹かれて野火止用水に一度は行ってみたいと前から思っていました。そうしたら、たまたま、「玉川上水の清流の復活」という事業がありまして、水のなかったそこに水を流すというのです。子どもの頃、小金井に来ていました頃の玉川上水はもんどりうって流れているような、渦巻いているような激しい流れでした。底はえぐられていて、入ったら出てこれなくなるんだといわれました。子どもの頃、橋の上から見ると本当に怖いくらいでした。それが今では、清流が復活したとはいわれているんですが、本当にちよろちよろとしか流れていない。何ともみじめなみっともない流れだなあという感じがする。そういったところも書いてみたいと思って書いたのが『のびどめ用水』です。

野火止用水は途中から暗渠になっちゃうわけですけれども、見せるところだけ出てくるんですね。ですから、川でもない、流れでもない、非常にわざとらしい、ちらとのぞかせるそこだけ観光の地点にしようというみたいな、なんかわざとらしい感じがする。ちらと見せるとい感じが嫌だなあという印象がずっとあった。

そこに訳のわからない女性が出てきて、これは実際に車で見に行って調べましたけれども、赤い車なんかは止まっていませんでしたけれども、赤い車なんかがあったら、面白いんじゃないかと考えた。その赤い車の中に豆腐があったら面白いんじゃないかと豆腐をいれたりもしましたけれども、これがその「のびどめ用水」ですね。

「けやき通り」

『たまらん坂』から始まって、『せんげん山』までかな、せんげん山は普通に「浅間」と書くあの字がありますから、『そうろう泉園』も『のびどめ用水』も、漢字がありますが、漢字で書くとおもしろくない。むしろ土地の名を音に向けて解放したい。地名というものは音で生きているというか、そういうこともあると思うんで、す。漢字で書くと漢字は意味を持っているので、限定的になってしまうから、それからは解放したいという念願はあって、作品の中では全部ひらかなにしようと思いつきました。

『けやき通り』の「けやき通り」というのは大変短い道ですが、これも実際にある道です。大きなけやきがあったのですが、今は切られてしまいました。そこに「けやき通り」と標識の出た道があります。

『たかはた不動』

最後になりますが、『たかはた不動』。神社仏閣ですとか、名所ですとか、有名なところなるべく書かない、なんでもないけれど、名前が印象的というところを書きたいと思っていましたので、そういう意味では高幡不動は例外です。実際に周囲を歩いて、日野までも歩いてみましたけれども、不動尊の前は、映画の寅さんで見ると柴又の参道と似ているんですね。

『たかはた不動』まで書いて、だいたい宜しかろうという感じで終わったことになります。

土地、舞台が共通だという点で連作という形になっています。

土地の名前というもの、土地の持っている歴史というもの、そこに暮らしている生活をベースにして、連作の場としてお話をつなげるというふうにして出来上がったのが、『たまらん坂』という作品集です。表題作の『たまらん坂』は舞台が国立ですから、本が出たときは国立の本屋さんに山積みになっていたという話は聞きましたが、売れたかどうかはわかりません。今でも国立にはたまらん坂があります。たまらん坂の途中に石垣があり、その石垣の石に清志郎のファンがサインペンでいろいろなことを書いていた時期がありましたが、それは取っ払われて、今は坂の途中の角の石垣にくぼみがあり「多摩蘭坂」という標識が建っています。その標識の周りにたくさんの花やジュースが供えてあるのを見たことがあります。

大変散漫な話になってしまいましたが、「『たまらん坂』を書くまで」と、書いてからのお話でした。

《会場からの質問》

Q:人物について、女性の名前や連作の全体のテーマというのは最初からあるものなのか、書いているうちに出来上がってくるのでしょうか。

A:漠然とした枠組みはありますが、『たまらん坂』の場合は武蔵野の土地を舞台にして、という大きな枠はありますが、どこに行ってもどういう人がいて、何があって何を話して、それからどうなったかというのは、実際に書き出してみないとわからないんです。なんでもいければ、書き出しが頭に浮かぶ、見合いをさせる、見合いをさせる二人が家に来るということがあれば、まずそういうことが頭に浮かぶ、それと濱浪泉園という前からどこかで気になっている場所が結びついたものと思います。いずれにしても、緻密に計画をたて詳細にノートを作るといった人もいますが、「たまらん坂」などは、わからないで書いていて、本当に調べながら書いていたんですね。なんかそういう模索みたいなことがむしろ多いですね。自分で最初、思ってもみなかったことが途中で浮かんできて書いてみたら面白かったという方が、喜ぶ楽しさを味わえると思います。

(平成二二年度武蔵野市寄付講座「武蔵野の記憶と現在—日本語・日本文学科からの第2信—」第一五回(二〇一〇年六月二八日・武蔵野大学)における講演)

(くろい・せんじ 元本学文学部客員教授)